

彼内村半^半と一日の遊宴^{遊宴}を御許容に預らは生涯の本望^{本望}是に不過^{不過}之分^分かたなき思ひの色^色筆に写して顕したるは推量^{推量}りても猶哀れ也掃部介^{掃部介}是を感じて誠^誠に人の難堪^{難堪}は執愛戀慕^{執愛戀慕}何かは苦しかるべきとて則半平^{則半平}に言^言聞^聞せ聊異儀^{聊異儀}に及さる旨本の矢尻^{矢尻}に結添^{結添}て寄手の陣^陣へそ射返^{射返}しける

矢文令披見候^{矢文令披見候}然者内村半平江御對面御所望^{然者内村半平江御對面御所望}」²として御狀^{御狀}得御^{得御}意候^{意候}誠^誠に以御志^{御志}之程感^{之程感}じ入候^{入候}昔より世の治乱^{治乱}度々成^{度々成}りと申せどもケ様成儀終^{ケ様成儀終}に不承候^{不承候}御志^{御志}しを思ひやり明日^{明日}於柳川原可有御對面^{於柳川原可有御對面}候^候尤半平江も右之趣^{右之趣}申聞^{申聞}せ候處^{候處}不及委細^{不及委細}致領掌^{致領掌}候故如此^{候故如此}候^候恐惶^{恐惶}謹言^{謹言}

十一月五日 伊集院掃部介
春田主左衛門殿

互の心想^{心想}ひ像對面^{像對面}許^許しける城主の心そやさしけれ^{城主の心そやさしけれ}かゝる干戈^{干戈}の折節^{折節}なれば両陣^{両陣}に簇^簇てたかひに雌雄^{雌雄}を命^命にかけ胡越^{胡越}の思^思ひをなす共志^志合時^{合時}は誰^誰かは恨^恨みを残^残すへき况^况や多年の親^親をや共に柳川原^{柳川原}に出合終日^{終日}の酒宴^{酒宴}して多日^{多日}の愁^愁を散^散しける敵^敵も味方^{味方}も諸共^{諸共}に感^感せぬ者^者はなかりけり^{かりけり}かゝりし人も有^有けるに伴^伴平終^{平終}に討死^{討死}し花顔^{花顔}香姿^{香姿}も徒らに原野^{原野}の³露^露と消^消緑髮^{緑髮}芳艸^{芳艸}忽^忽ち⁴荒叢^{荒叢}の下葉^{下葉}の影^影に立隱^{立隱}るれば⁵い⁶かばかりか⁷の人の袂^袂の露^露も深^深からめ⁸と想像^{想像}たに哀^哀にて⁹餘所^{餘所}の袖^袖だにほしあへす¹⁰只¹¹槿花^{槿花}の朝^朝榮^榮暮^暮と皆人^{皆人}悲^悲しめり¹²問^問の¹³牆^牆結^結る¹⁴事^事

同十六日城の通路^{通路}を絶^絶んがため^{ため}青竹^{青竹}を束^束て上^上は井ろうの下^下より川隈^{川隈}に至^至る迄^迄寸隙^{寸隙}も置^置すかき¹⁵」¹⁶を結^結ひ下^下は長州^{長州}塚^塚より新山^{新山}守^守の前^前をかき¹⁷り遠目^{遠目}塚^塚に至^至まで¹⁸鹿垣^{鹿垣}を必^必至^至と結^結ひ垣涯^{垣涯}には大堀^{大堀}をかま¹⁹へ乱杭^{乱杭}逆茂^{逆茂}木引^{木引}並^並西^西には諸軍^{諸軍}對陣^{對陣}堅^堅して毫里^{毫里}の隙^隙もなかりけり東^東には川^川の流水^{流水}深^深し²⁰容易^{容易}に通^通るへきにもあらねば志和池^{志和池}の城^城の糧道^{糧道}絶^絶て軍兵^{軍兵}首陽^{首陽}の患^患を抱^抱キ²¹始^始のほどこそ粥^粥なにて朝三暮四^{朝三暮四}の²²資^資と²³し²⁴けれ次第^{次第}に兵糧^{兵糧}つきければ牛馬^{牛馬}の肉^肉を屠^屠りて食^食し或^或は死人^{死人}の肉^肉を割^割より外^外露命^{露命}をつぐべき便^便もなし角^角て²⁵一日^{一日}片時^{片時}とて²⁶なからへあらん心地^{心地}なければ²⁷流石^{流石}に消^消ぬ露^露の身^身の命^命あらばとおもふ世^世に頼^頼をかけてや残^残るらん²⁸」²⁹

蒙り味方の陣に引退く 園木も股に痛手を」(ウ)負 暫し息を継んかため
 城中に退処に 小川伴助 内村半平兄弟列て切て出るに城戸の口にてゆ
 きある 伴助園木か袖をひかへて 天晴 勇々敷見得参候 幸哉我等も
 多年の本望此ときあり 誰も角こそありたけれ 敵に逢て討死し 武
 士の素懐をとくべきため 只今打て出ル也 今生の對面も是迄そ と云
 捨て兄弟共に打て出ル 園木も又ひき」(8・オ)かへし 今此時に至て誰か露
 命を惜へき 我も望みは同し事 兼て期したる事そ とて三人つれて打
 て出ル 誠に武士の手本也 とほめぬ人はなかり かくて小川伴助は
 平田民部左エ門尉と鎧を合て互に雄を争ふ 然るに平田は鎧を持せ肌身
 にて 只中をつかれ後の築地につきつめられて 小川か胸に鎧當てつか
 んとするに力なし 小川其鎗先をとりて 鎧」(ウ)の草すりた、み上ケ
 片股をつかせたれば 双方共に深手にて終に討死す 弟の内村半平は本
 田兵右エ門尉と鎧を合せ 本田手負て引退処に 比志嶋宮内少輔さし替
 り鎧提けて渡り合ふ 伴平は戦つかれ 其うへ痛手蒙りたれば 兄弟一
 処に打死す 園木も痛手負ながら殊に労も休めず 強敵の中に突て入り
 是も同く打れける 味方には平田民部左エ門尉 本田兵」(9・オ)右衛門尉
 池田仲左衛門尉 此時に打死す 抑園木治右衛門は元来北郷の家臣
 なりしか 先年所領改易のとき祁答院へ移るへかりしに 忠棟入道の所
 望に依て 思すも忠棟が臣と成て 志和池の城にそ居たりける 其弟
 兩人は主に従て宮之城に從待して趣ける 此一乱出来しかは 志和池の
 城主伊集院掃部介彼が心を疑ひ 兼て不審ぞ含ける 治右エ門このこと

を」(ウ)察したるにや 兼く云ひけるは 我露ほども二心なし 士の本
 意冥加もいかゞ 好掛合の軍あらば 一番に討死して 城主の疑を散せ
 んものを と牙をかんでいひけるが 果して勇士の義を守り終に打死し
 てければ 敵も味方も押並んで皆感涙をぞ流ける 扱も小川伴助と内村
 半平は忠真か近臣にて影の如く相隨ひ 都城に居たりしか 故有て兄弟
 共に忠真に暇を乞イ」(9・オ)志和池の城にぞ籠りける 然るに半平は生年僅
 か拾六歳 容顔殊に麗しく 生質世に亦類もあらざれば 忠真深く寵愛
 せり 去は化なる世の中にも流石にたまぬ人心 いつかそれ と云初て
 日比好や深かりけん 寄手の勢の中よりも矢尻に文を結イ添て 志和池
 の城に射る人有り 城中の兵共此文を拾ひ取 城主掃部介が前に出ず
 即披て是をみるに

態と一筆令啓上候 然者御内之内村半平儀 拾四歳の春の比より兄
 弟の契約をいたし 皆老之契り不浅申談候処に 不慮に此一乱出来
 所々敵味方と成て日比之契り空敷 互に一命を主君の為にやいはの
 鋒先にかけて 名を後世に残さん事を思ふ 雖然此三ヶ年が間互に申
 馴し言の葉 又は對面不致して」(9・オ)空敷修羅の陌に落ん事 なげかし
 き儀不過之 哀 願くは大将の御免を受けて 一日之對面御免し候へか
 し 對面の節に至つて 死を供にせんとにはあらず 日本国大小之神
 祇 別而八幡大菩薩毛頭表裏無御座候 恐惶謹言

十一月五日春 田 主 左 衛 門 尉
 伊 集 院 掃 部 介 殿

池の城邊にて敵とたに見てければ 遠近の隔もなく矢を放ては現りに射殺事 揚雄が百歩の揚樹も」(ウ)角やと覚計なり いかにもしてかの者を射取んと謀しかとも 其行便なし 味方に東條能登といへるは 河野か多年の朋友なれば 謀て呼出討べしとて 井樓の涯に立出て高聲に呼びけるは いかにも 河野刑部左エ門殿は城中にましく候や 角申某は東條能登と申者也 むかしを思へは敵も味方 貴邊と某は竹馬断金の好たり 去共世の中物そふにて 敵味方と隔つ」(84)これは 暫時の對面いたさん為罷出候也 と高らかに云ければ 川野は更に思惟もなく庭上に下立処を 井ろうの内より鉄炮を放て立処に射て踏す 昨日の花は今日の塵埃 昨日の友は今日の冤讎と古人の傳へし言葉の末 實にもとしられ 浅まし、

阿和井か塚伏兵の事

去程に神無月中の六日の事成にまた明果ぬしの、めに 高城 城主小牟田清五左衛門尉兵卒五拾人を悉らみ阿和井塚に隠し置 太守の勢をおひき出し 短兵急に挫んと 態と式拾余人の小勢をは高木の川隈にさし遣 御陣森田に打向ひて鉄炮を放しむ 御陣の大勢 茶園ヶ尾北郷勢 是を見るとひとしく真一字に川を渡し 真霧に打て掛る 敵の勢は」(85)本よりおびき出さん為なれば 太刀打合す迫もなく高木を差て曳退く 味方の勢は是に機を得て 汗馬を休す首の川に追付て 双方互に入乱命を限りに攻戦ふ 敵兵終に開き靡ひて 小山をさして引退く 味方は猶も勝に乗 勇ル馬に鞭を進て 北を追事数町なり 敗北

の敵の中より強兵式人取て帰し 味方の勢に打てかゝる」(ウ)高橋武蔵と白坂式部と馳向て相打に打ければ 財邊武蔵盛利又一人を打てけり 味方弥勝利を得 小山川原を掛渡し大楽に至処を 阿和井ヶ塚に置処の五十余人の兵とも 一度にどつと呼て掛れば 小牟田清五左衛門も小山古川に旗を挙 ときを作て攻近く 高城の軍勢も相圖の貝を吹鳴して 前後を囲んで攻戦ふ 味方の勢も手を碎き千」(86)變萬化機に應して 七縦八横に挑戦ふ 誠に鋭氣傑然として鉄塔踏破の勢なれば 兩陣の矢叫は天を響かし 地を動かす 敵味方入交り 掛開らき 追靡き 白刃碎火を散し 利鏃骨を穿 汗馬の蹄に血をそ、き 時を移して責戦ふ 味方に中原中将坊柚木崎吉助を始三百餘人討にけり 敵にも小牟田清五左衛門小山川原の戦」(ウ)友重十郎右衛門に逢て 忽打死す 其外河野七兵衛尉 谷口孫左衛門尉を始て或手負討る、者更に限もなかりけり

柳川原口 鎗合付 小川兄弟 戦死の事

霜月八日の事成に志和池の城より士卒を出し 薪を城中に入んとす 北郷の手勢是をみて 柳川原に隠居て其数餘多討取ける 城中の兵卒是を みるにしのびす おのく引つれて切て出 御陣の衆兵足を みてみかた」(87)討すな 續もの共と我先にと打てかゝる 敵の勢も刃を揃へ入乱て攻戦ふ 味方に小杉太郎左衛門尉頼氏 有田神祇光規 宇都宮加兵衛尉等忽に打死す 分捕の者も多かりけり 時に城の中より園木治右衛門尉と名乗て鎗提け掛出し 味方にも敷根仲兵衛尉と名乗て 互に鎗にて勵しか 仲兵衛尉疵を

中務太輔忠豊 次は北郷長千代丸同作左エ門尉三人の陣所也 城より北方天神か尾には嶋津右馬頭征久 其後に當ては京都よりの下向勢透間もなく陣屋を打 扱京陣に相並んで豊後よりの見續勢陣取て扣たり 是皆寺沢志摩守 大田飛彈守 高橋」(ウ)右近 秋月長門守の陣所也 かくのこたく諸方の勢志和池の城を挾て 陣々を固め堀々さくり廻し築地を構四方の堀に武見をあげ 中々堅固に相構て 幾年月を過とも意安く 覚ける 敵の城と味方の陣とは其間僅の事なれば 敵味方名謁して鉄炮を放事 百千の雷一時に轟かこたく也 山内因幡守義秀十一日の合戦に鉄炮に當て死にけり 又其頃」⁽⁸⁾斥候のため味方の陣より勢を出し 志和池 高城の邊に徘徊して 敵の要害を窺しむ 或夜味方の兵小山川原のほとりに出つ 高城に籠たる有村三良兵衛尉武清 是も検見の為にや 出けん 味方ノ勢に紛れ入てなりを静て居たりける 折ふし松明をか、けたれば 柵山与右衛門尉忠泰是を怪しめ 見馴ぬ兵の交たるは鹿兒島勢の中なるか 又「誰」(ウ)人の臣下そ と深く評議をしたりければ 有村は左まてすくり出されて叶 ひとや思けん 一足無心に馳出し高城さして逃 行 忠泰を始 されはこそ 餘さし と城戸近く追詰たり 有村聲を挙 武清こそは敵に逢て討るゝそ 味方はなきか 出合へ と山も響けと匂りける 城中の勢とも 有村討すな 續 とて城戸を開て切て出る 有村は敵兵に追詰られ」⁽⁸⁾刺運尽堆土につまつき倒けるを 忠泰すかさず馳来て 持たる太刀にて丁ときる 去共大勢續き扶來れば 後太刀を打に隙もなく 味方の勢にひき立られて 本の陣にそ引返ス

有村 いか成天運にや 後頸をきられ共 淺手なれば恙なく味方の勢に扶られて 後の合戦にも度く勇を勵して 終にも討れさりければ 軍和睦の其後は」(ウ)北郷家の臣と成 平山乗賀と名を替て つれくの遊言に互に往事の旧事を語て 汝か首は我物そと思しに と一坐の興に勇を争ひたわむれける 井 ろ う の 事 同月味方の陣中より敵の城中を見透んため 西柵の内に井樓を揚られしかは 千里を眼下にみおろして さながら志和池の城中を掌に見るかこたく」⁽⁸⁾遮る所もなく脚下に見 秋毫の先を数つべし 井ろうの下には中原中将坊陣屋をうつて是を護る 西柵と北郷陣との間には 諸所の軍勢相替て守護したり 井樓の涯には鐘を双て牆を結 柵を引て中堅固に相構へ 日々井ろうに士卒を登せ 城中を見て敵の方行の様まて明にしり 鉄炮を放たしむ 城中の兵卒鉄丸に傷られ 箭場に死」(ウ)ものあり 疵を蒙るものもあり 是を防くに便りなければ 城中に堀を構て 其内を跼 互の役所へ往来せり 或時内藤喜兵衛尉利泰井ろうの上に登て敵の陣を窺しに 後の差間を閉さればせいらうの内透通て 城中の敵兵より井ろうの上には人登りて有よと見 鉄炮を以て是を射に あやまたす井ろうの差間を通り 利泰是に當て」⁽⁸⁾死す 又志和池の城中に河野刑部左衛門尉と云もの有 彼は元來北郷の家臣なりしか共 祁答院へ移ららす 幸侃か手に属し志和池の城にそ籠りける 若年の頃より鉄炮の達者と呼ばれて 今度の合戦にも餘多奇手を射たりける 其上志和

主殿介宗吉 竹之下渡兵衛尉 黒木佐左衛門尉 萩原平右衛門尉 厚地
 左近兵衛尉 池田與三 櫻木志摩 友重渡左エ門尉 松ヶ野九郎右エ門
 尉 黒木後藤重直 中間共捨五人堅陣に突て入 各首をそ取たりしは
 尤由々敷こそ 見へにける 此日^(ウ)うち取敵の首凡八十余級なり 長
 千代丸の手勢にも打るゝもの許多にて 疵を蒙たるも多かりけり 爰に
 不思議なりけるは上井仲五の首級なり 最前小谷頭の合戦に上井仲五馬
 を叩て居たりしを 忠真が手の兵松永五左エ門尉と云もの觀面に行逢し
 か共 松永億して 有けん 亦是時の運にてやあらん 鉄炮をだに放
 す いたつらに走過しは尤本意なき事共也 其後に⁽⁷⁾仲五は梶山諏訪
 明神の大宮司谷口伊豫が為に討れぬ 伊豫すでに首を取しかと 北郷家
 の軍勢に横合に掛立られ 取たる首も徒に堂の廻に打捨て 梶山道こそ
 引たりける 不思議や 彼首道路の叢に投捨たれば 馬蹄の塵に埋没せ
 られしを 目なれぬ童子是を取て 野之見谷城中諏訪の神前へぞ参りけ
 る 社人二龍が女房是を見て 神は^(ウ)不浄を戒給へは 構て宮居に近
 付され と彼童をせるしけれども 何共答る言なくして 寛爾と笑て過
 にける 女房かくと夫に語れば 二童は驚き社殿に詣して 件の童を尋
 て東西に徘徊すれとも 童子は敢て見へさりけり 仲五の首は正しく社
 壇の床下に在ければ 則これを城主へ送りければ 扱こそ仲五討れしよ
 と城中には色めきける 此度の⁽⁷⁾合戦は専北郷の手勢粉骨を尽せる
 故 大軍を靡しかは 義久公聞召て 御感悦斜ならず 戦功の次第詳に
 言上すべし と仰を蒙る故に 伊地知諸右エ門尉を以て合戦の有様残な

く貴聞に達ス 殊には少将忠恒公 今度の戦功莫太也 とて御感贖を下
 し給ふ

去ル十日於野之見谷 其方手之衆致合戦 得勝利首数打捕註文到而珍
 重也^(ウ)各尽粉骨或打死或蒙疵由 尤神妙感悦無極所也 弥可抽軍
 節候 恐々謹言

慶長四年

九月十三日 忠恒御判

北郷長千代殿

北郷作左エ門尉三久は舍兄忠虎逝去の後 長千代丸幼稚故 北郷家の
 軍代として 去ぬる文録年中にも⁽⁷⁾朝鮮国まで渡海し 数度の軍功隠
 なし 此度も又祁答院より長千代丸を携て 数千の軍兵を惠撫して 汗
 馬の功に勝利を得 長千代丸に御感状を下し賜ふ 三久是を謝せんがた
 め 嶋津圖書頭忠長入道紹益に憑て 御請文を奉らる

從忠恒様被成下尊書候 謹而致拜領候 抑今度於野之見谷被軍勞候通
 被仰下候^(ウ)外聞忝奉存候 到向後可勵勢力事不可有疎意候 右之旨
 宜預御披露候 誠惶誠恐謹言

九月十五日 作左衛門尉三久判

進上 凶書頭殿

森田御陣の事

去程に十月五日薩摩少将忠恒公志和池⁽⁷⁾の南方森田に御陣を移
 させ給ふ 御陣の南は入来院又六重時の陣 北は阿多長寿院 次は島津

して野之見谷城に引退ける 梶山 勝岡の勢共皆悉く敗北して己か城
 く⁽⁷⁾ 1. 江楯籠る 高城の城主比志嶋彦太良大勢を卒して川を過 釈迦
 堂原に打上るといへとも 横合の勢に掛立られ 一支も支へず又川を掛
 渡し 金田の如く引退き 高城をさして人なたれをついてひき帰す

野之見谷軍の事

角て味方の勢とも三方の敵を追拂ひて 猶野之⁽⁷⁾ 三谷の勢共のにく
 るをしとふて追程に 撰立寺馬場まで息をもつかす責入ける 爰にて敵
 軍返合て 猛勢籠入敵を防き留んと 一面に切先を双へ 群り来ル大勢
 の中に面もふらす切て入 互に組て勝負をし 差違て死るもあり 或は
 名字を名乗挑 戦ふものもあり 頃刻に變化して萬卒相交り 巴の字に
 廻り十文字に通る 兵刃互に入乱て真牛角⁽⁷⁾ 2. の軍なれば 射違ふる矢
 は夕立の軒端を過る音よりもしけく 太刀の鏗音矢呼の聲空に答 山彦
 のなりやむ隙そなかりけり 味方進んでこみかさなれば 敵競ひて相防
 く 帝釈首羅の鬪諍も角やと覺て夥し 角て両陣の勢東西南北追廻し掛
 やぶり 左右なく颯とわかれば 死骸に死がい切重る さしも間
 深き堀一ツ 死人⁽⁷⁾ (ウ)を埋て平城と成 味方にも知覧兵太久縁鉄炮に當
 て死す 其外徳丸三之丞儀真 手束久右衛門尉光次 清水飛弾 谷口右
 近 和田仲蔵 松葉佐孫兵衛尉 平川市右衛門尉 同傳三郎等を始許多
 の兵討死して 死躰はちまたに充滿せり されとも味方の軍勢は親兄弟
 討るゝを 乗越て進み 主討るれとも顧す 先を争ヒ籠重る 小杉丹後
 守重頼は⁽⁷⁾ 3. 城戸の内に攻入 城主古垣与兵衛尉忠與と名乗り合て 一

番に鎧を合 相引に退く 重頼か郎等加賀市といへるものも 東條清閑
 と鎧を合 下ろうの身として健気なり とほめぬ人はなかりける 又寄
 手の中よりも財邊寿福坊湛賢と名乗て出しに 又城中よりも古垣与兵衛
 手鎧提け掛出て 城戸口にて鎧を合す 次に高松三郎右衛門尉正隆 伊
 地知諸右衛門某も⁽⁷⁾ (ウ)相續て鎧を合す 時に和田半兵衛尉正綱と重信源
 兵衛尉家張は城戸ノ口にて戦しか 敵兵を悉く城戸の口に追籠て 相共
 に退し時 家張正綱に向ていひけるは 我々捨身の功を勵して 是まで
 敵を追入し驗なくては叶まし 如何せん といひければ正綱答けるは
 何そそれには及へからず 大功は我身にすべて覺たり 家張重ていひけ
 るは⁽⁷⁾ 4. 我々勲功隠なしとはいひながら 自身の功を挙 事 世におこ
 かましく覺けり 他の疑も有ものそ と又立かへり 長刀にて城戸の柱
 を三方きり 心閑に引退く 神田橋又兵衛尉助康は八幡城の切岸の下
 二の城戸まで責入しを 城中の兵鉄炮を揃て射たりしか 助康只中を通
 され 犬居に倒て死けり 時に神田橋筑後と云もの同氏の好み深かりし
 かは助康討れし⁽⁷⁾ (ウ)と見てければ差替り切て入 是も鉄炮に當り則其場
 に死けり 抑 野之見谷の城と申せしは 路を間に挟み城を左右に構け
 れは 寄手の兵責入処を 双方に挟間を開て散く⁽⁷⁾ に射たりけり 去と
 もよせ手は猛勢にて 物のかすとも思はこそ 本城近く攻入たれば 外
 郭即時に攻破り 城の野頸に旗を揚ケ 北郷源左衛門尉久親凱歌をそ挙
 られける 此度も⁽⁷⁾ 5. 須田藤七兵衛尉利基は先懸して首級をこそは得た
 りける 其外内藤仲左衛門尉 伊地知弥右エ門尉 長井孫兵衛尉 小濱

晒さんよりは死て名を留よ と掛つ返しつ争戦ふ 鉄炮の音天雷を轟し
 兵鼓吐氣のこゑ山川を動す 忠真のあら手の勢に味方の小勢7なし
 かは以て對揚すべき 石黒平助か 松永賀兵衛 濱川郷右工門尉 笠野七
 郎 中嶋右近を始として悉く打死ス 爰に池袋神吉宗信 児玉軍八と祁
 答院を出し時 此度の合戦には互に功を勵して二人に一人戦死せは 共
 に骸を晒すへし とかねて契諾したりしか 志和池 山田の合戦にも勲
 功人に越たりしか 此日宗信深入して終に討死してければ 軍八も其約
 を違す 族る敵にウ打入一所にこそは討死す志こそ浅からね 久保新
 八秀定は敵の矢に傷られ 坂之下兎角之介宗豊は鉄炮にたよふ処に
 平川藤左工門尉宗次 蓬原神左工門尉兩人馳來り 兩人を助て曳退く
 曾我助左衛門尉祐守も痛手負て危かりしに 原口神兵衛尉馳來り相扶て
 引退く 味方に須田藤七兵衛尉とて大剛のものあり 一陣に進み働くに
 忠真か兵に稻元市右衛門尉と名のり68て 日来承及たる須田殿江進
 上致へきに而候 うけて見給へ と匂りて大雁俣を打番て そゝろに挽
 て懸りけるを 藤七兵衛尻目に睨て 汝如まきの小兵の射矢 我身にはよ
 もたし 只一刀に切て捨ん といかつて眼をいらけ丁と睨 其陣倒
 に裂たるひかり光 百鍊の鏡に朱をそけるにひとしければ 稻元いかな
 る憶病にや 此勢に僻易して 入たるウ矢をも打捨て 振ひおのき
 てそ逃去ける 唐の樊噲ははいかれる髪甲を貫き 我朝の利基は睨る眼に
 鏃を避ル事 時の運とそ覺たり 去程に小松ヶ尾の軍時移りて 互に雌
 雄を争ふといへとも 忠真が勢はあら手にて入替く攻ければ 味かた

しとろに見得にける 重信源兵衛尉家張 須田藤七 兵衛尉利基彼等兩人
 殿して 味方の手負を相扶 敵は弥勝に69のり 競進て追たりける中
 にも 鹿の角の立物して汗馬に鞭を進めて 真先に進んたる武者あり
 花房早兵衛尉兼延鉄炮を放ち 馬より下に射て落す 去共敵は大勢にて
 追掛れる×いきおひ さのみ疑擬する気色もなく 雄を争掛ける味方の一
 卒 この猛勢に追立られ 残すことなく討れつべふぞみ得にける かゝる
 処に北郷喜左工門尉久陸ウ三百余騎を引卒し 大野田より馳來り 味
 方の勢を助たりしかは 忠真が軍勢も都城へそ引退く 味方の勢も小
 松ヶ尾を引退き 小杉丹後守重頼か備へを設て居たりける鶴の嶋山まで
 引たりける かく小松ヶ尾の軍最中なるに 又安永の城よりも敵の勢打
 て出 味方の後を遮らんとしけれども 嶋津中務太輔忠豊かねて安永の
 押として 多勢を卒して向れければ 左右なく懸り70あずして 皆城
 中に引籠り 城を守りて引得たり 又野之見谷の城よりも敵兵許多討出
 たり 爰には川田大膳亮 上井仲五阿多 長寿院 肝付半兵衛尉 敷根仲
 兵衛尉数千騎にて馳向ふ 野之見谷ノ勢どもに梶山 勝岡の兵卒援來て
 小谷頭にてせめた而かひ 従横無け尽に競ひ掛る軍なれば 将卒互に入
 乱て 刃をつかみ鏃を噛て 爰を専途と揉合けるウ野之三谷の城主有
 屋田大炊左衛門伊東原にて討れければ 味方にも上井仲五小谷頭にて打
 死す かゝりしかは仲五が勢半は打れ半は乱れて分散せり 敵勢は勝に
 のるとそ見へし得処に 北郷作左工門尉三久の軍勢 猶鶉の嶋に備へしが
 小谷頭の軍をみて 釈迦堂原に掛出て 横合に切てかゝる 敵勢敗北

戦士の苔の下 独り越なん冥土の旅 としたる行こそ哀なり 情是を感
 するに 春の朝の花の色無情の風に誘われ 秋の夕紅葉の一夜の霜にう
 つろゐて 化に散行風情より 猶墓なくぞ見得にける 件の兩人首途し
 て 庄内に趣 とき³ 隅州敷根門倉の葉師堂に參詣し 柱の上に書結
 て 庄内軍旅に趣 と記けるは後の世迄もきゑす名は 留て
 その身は野外のくさむらの露の下葉の土と成て朽ぬ 聞人見る人袖を絞
 り 實や 龍門原上に骨を埋み名を埋まざるとは かゝる事を 傳らん
 新納武州追悼の歌に

昨日まで誰が手枕に乱れけん^ウ蓬がもとにかゝる黒髪

とつらね給ひ 時の士卒に示さるゝ 今に古老の心ある人肝に銘し 世
 に唱ふとかや

新納拙齋詠歌の事

抑忠元和歌に心を寄られし事は 或老翁の物證に 拙齋壮年の頃成け
 ん 紅葉色付秋の暮 ゑならん興にさそわれて 遠近のたつきもしら
 ぬ⁴ 山傳ひに さまよひありき給ひしに くるゝもしらぬ四方の原
 立寄陰を縁にとて 有一屋に立入て一夜の宿を借られしに 主の女詞も
 なく 鳩ふく哉 と登しを忠元 何事やらん 如何様片言か 宿をかさ
 し ののべ句か と其後 人に問れしに おろか成かな 古歌に
 賤の女か鳩ふく穂の夕間くれ^ウ止れと人のいわぬはかりに
 といへる心なるへきを 知玉ぬこそ怪しけれ と友人にとがめられ い
 やしき賤の男賤の女さへ歌の心をしりけるに 念なくも覺らさりけるこ

と 残氣の心大かたならず 夫より和歌の流を汲んで 武学の際には折
 節興に引れて 時くは口すさみ給ひけるとかや されは月の前の郭公
 と云題にて

郭公雲間の月の一こゑに面かけきゆる花も紅葉も

小松ヶ尾合戦付小谷頭軍の事

九月十日忠恒公 逆徒の張本忠真が楯籠ル都城を攻給ん其為に 山田
 の城御進發有 野之見谷 乘満寺の原に扣へ給ふ 北郷作左衛門尉三久
 先陣を給り 長千代丸之從兵を引卒して 大野田に備へを立^ウ 山内
 作右エ門尉助次 坂之下兎角之介兼道 久保新八秀定 平川藤左衛門尉
 家次 児玉軍八 蓬原神左衛門尉等を諸軍勢に先達させて 宮丸に押寄
 しび田 徳益両所 忍入 相圖の時を示し合 処々の在家に火を放ち
 ければ 四方八面焼立て 天風頻に起て猛煙空を掠 其焰飛ちれば 万
 点の星雲外をわたるが如くにて 天も焦やうにぞおほへける⁶ 源次郎
 忠真都城よりこれを見て 大に驚肝を消し衆兵に下知していひけるは
 すわや 強敵の蕭牆に近付ぬと覺なり 馳向て追ちらせ あますな
 もらすな 億するな とて自ら討て出んといひ 手つから馬を取て引寄
 飛騎ければ 都城に籠りたる宗徒の一族郎従等忠を勵す色見得たりしか
 は なしかば以てぎ々すべき 猛火の邊を志して 我先にと精を^ウ 競
 ひ 力を尽し馳向ふ 放火の兵卒無勢なれば 勇を争ふ力なく 相戦ふに
 取困れては叶し と速に引退 跡の味方に加らん と大野田差て開き行
 敵兵急に襲来て小松か尾にて追付ぬ 味方の勢も返シ合せ 生て恥を

(65・オ)

意を蒙る事 生涯の面目何事か是に過ん すみやかに領掌申上御手に屬したく候得共 日比の主を背事頗る武士の本意にあらず 去れとも又重き君命を違背申も恐れ 也 只某が兄の候 一先「(ウ)相義し候わん」と兄の善左衛門に角と語る こは有かたき御誼哉 かゝる時郎ならずんば何に依て不肖の身御奉公仕ん哉 速に御手に参り粉骨を尽すべし と又餘義もなく諫ければ 去は御誼に随べし とてすてに其夜も深過を山傳に忍出 御味方にぞ参りける 兄も別れを悲みて路半迄送り出 互に離別の袂をしほりて 是より慈愛の好をたち「(5)敵味方と隔りし武士の道こそはかなけれ 龍伯公御喜悅あり 清水之内郡田に宅地を給り かの伊之介をそ召置ける 去程に國分の住人安樂伊豫 勝目八右工門尉市成隼人 石塚七左衛門尉等に命し 伊之介が案内にて山傳ひに忍入敵の要害を窺はしめ 是を山潜の勢と名付く 忠恒公は兼てより庄内におわしませば 合戦の御計略たがゐる」(ウ)御行かのもの共ぞ承り 敵の境を忍通 常に両地に通達せり 爰に於て龍伯公財邊の城をせめ給んとて自ら御馬を出させ給ひしかは 嶽(白毛峠)と云処に御本陣を構へ城を攻させ給ふに 城中よりも打て出 古井 屋ヶ城の原にして両陣互に細名川を隔て 鉄炮を放挑戦ふ時 向の岸の上に敵兩人立并て 寄來る勢を射るにより 左右なく近付「(6)者もなし 然るに讚良善助某鉄炮を放ち 是をあやまたす一人か直中を通しければ 俯しさまに岸より落所を 一人の敵其足を引 扶上んとせし処を 間も透す射鉄炮に彼敵もまた射られて 兩人共にいやか上にかさなり 岸より下に落にけり こ

れを軍の始として敵味方入乱 山谷も震動し溝岳も崩 ことく 凱歌の聲天地に」(ウ)響 鉄筒の音矢叫相交り 夥しくぞ聞得ける 寄手に吉田大内蔵康時 平田仁左工門尉 宮内治部等討死す 其外両陣の勢手負打死数をしらす 親を先立子に後れ袂を絞 者もあり 主を討せ兄弟に離れ胸をこがせる族もあり 別情さまくなり 其中にてわけて哀に聞得しは平田三五郎宗次なり 是は平田太郎左衛門尉増宗の息男 今「(6)1年三五の秋の月雲間を出る風情より 猶うるわしく色深し 容顔無双の少人たり 吉田大蔵康時に兼て好浅からず ともに故郷を出しより 片時も相去す 征鞍郊原に吟日は 鎧を双轡をそろえて 同 馬蹄の塵にまよひ 軍旅野外にたむろせば 同し褥のかり枕 共に詠る夜半の月 又合戦の場込も同し道にと志し 諸共に」(ウ)掛引戦場に隙なく 不思議に押隔られ 康時つゝに打死す 一騎當千の郎等に佐藤兵衛武任といふもの 彼死骸を肩に懸 味方の陣に引退き後をみれば 宗次は卯の花威の鎧を着し 甲を頭に戴て 嬋娟たる顔せに「(ウ)たる鬢髪に乱れたるは 楊柳の春風に散漫たる風情也 武任是を見て 宗「(6)2次公に而まし」か と申せば 康時はいかに と宣へは 討死 と答ふ こわいかに 淺猿 と馬より下に飛て下り 其儘死棘に抱付暫涙にむせはせ給ふ 敵も味方も合戦に寸隙もあらばこそ 是迫也 といひ捨て 又引寄て馬にのり 再後も顧す 敵場無心に懸入 忽ち古井の原上草葉の末の露霜と消給ふこそ轉けれ 而れは弓箭取身の習には「(ウ)貴も賤も勇義を守武士の捨命と云ながら 例すくなき交愛の花の縁に引れつ、 同

向ふ 是を搦手の勢と定 一手は又稻り」⁽⁵⁾の尾より藤野 吉行をすき
 楠牟禮の渡りに至る これを大手の勢と定む か、し処に志和池の城
 より敵の軍勢出向て京の牟禮の岡に備へ 大手の勢に相向ふ 両陣互に
 鉄炮を放ちいとみ戦ふ 其音山に答へ谷に響き 高天も破れ落ち 坤軸
 も碎つべし 奴電狂浪の勢もかくやと社は覚へたり 此時佐藤弥五右衛
 門尉家臣田中久右工門尉義利 其外味方の軍兵鉄丸に」^(ウ)當て死す
 か、る処に搦手の軍兵は万太郎渡りに責近くを 敵の勢とも遙に見て
 京の牟禮を曳退て 志和池の城へ馳返る 爰にて味方両手の勢を一手に
 合せて 志和池の搦手羽田口 池の川邊まで一同にせめ寄たり 時に味
 方の勢よりも武者一騎手鎧提け掛出 財部與右工門尉盛房と名乗て 城
 中に鎧を 望む 又城中よりも忠真が」⁽⁵⁾家臣小岩屋備中守と名乗てし
 つくと出て 近き 互に鎧を合 んとせし処に 透間もなく射る鉄炮
 に 盛房妻手の大脂掛ケ三つまで射させければ 力及はず引退く処に
 又寄手の中より 重信源兵衛尉家張 と名乗て鎧を合す 備中が嫡子七
 郎三郎は父が後に立て互の勝負を見物ス 家張が良徒与兵衛といふもの
 も主の後にひかへて」^(ウ)軍のよふぞ見たりける 角て双方相引にひいて
 息をぞつかれたり 是を軍の始として 敵味方入乱れ火出るほどぞ戦け
 る 爰に藤井十左工門尉氏順は栴山与次右工門尉忠泰 阿久井式部左衛
 門尉三人示合て むらがる敵を追まくり 城戸之内まで責入しに 東霧
 嶋の住僧舜覺坊 鹿毛なる馬の尾かみ共に飽までたれてふとくたくまし
 きに乗り 坂の上にひかへ たり」⁽⁵⁶⁾けるか 責入敵の中に懸入 生命

をおします戦ける 左計りの法師武者に懸立らる、者多かりし処に 氏
 順きつと見て一文字に馳懸り しばし戦と見得しか 氏順終に討勝て
 舜覺坊は冥途黄泉十萬億土の族と成てそ失にける 然るにこの僧一たび
 名利の門を出 剃髮染衣の姿と成 戒教妙藏の法を保つ身が 忍辱慈悲
 の衣の上」^(ウ)邪見の刃を携へ 角戎卒の機を踏す事は 忠棟 か帰依僧
 にて重恩を得たりしか 縦沙門の身たり共其厚恩を報せん と今 角
 戦士に骸を晒して 永く修羅の罪業の程こそ拙けれ 角て寄手も戦 勞
 れ 已 本陣に引退 この日打とる敵の首拾三人 一所に埋 十三塚と
 ぞ名付たり 今に遺蹤現然として世に傳へて有にける
 財邊 軍 并 平 田 吉 田 戦 死 の 事
 爰にい集院甚吉と猿渡肥前守が楯籠る隅州財邊の城と云は 都城の西
 面にして其間僅か一里に餘れり ことに忠真が股肱の臣い集院五兵衛尉
 白石永仙等が籠る安永の城に隔られ 御陣の勢は寄手攻るに道そな
 き 去共隅州国分よりの山路あり 其比は龍伯公隅州濱の市にましく
 ければ」^(ウ)別に隅州の勢を以てかの城を攻給わん御志しおわしけれとも
 敵地の案内を知る者なし 重ねて御賢慮を運さるに 忠真が家臣前田
 伊之介と云者あり 高野といへる山家にそたちて 深山幽谷に身をこら
 し 岩根松が根踏馴て 血氣壯の若ものなり 彼を味方に召れなば 財
 部をせめさせ給ふ第一の便りなるべし とて関屋四郎右衛門尉に仰て」
 かの伊之助をぞ召れける 関屋ひそかに夜半に紛れて伊之助か宿所に
 至り 御錠の趣を相達す 伊之助謹て承り 某匹夫の身と生れか、る上

義久入道竜伯公歎して宣ひけるは 我現其國に在といへとも 敵地の
行粧（オ）さとしゑて 何の程に落去すへしとは敢てしらす 況や山海数十里
の行程（オ）を隔ておや 然るに今内府公落去の期をしらせ給ふは
あつはれ（オ）いかなる御賢慮そや 愚慮の及所にあらず と感悦殆と淺か
らず 然るに又内府公より御内意を蒙り寺沢志摩守重政 大田飛彈守
高橋右近 秋月長門守援兵を引卒し 已に庄内に出張せらる 偏に家康公太
守公への御懇情淺からざる処也

東 霧 嶋 軍 の 事

去程に七月十三日 山田の城御勢と長千代丸の軍勢 北郷善左衛門尉
久陸を將として志和池 野之三谷を打廻る 高城 志和池に籠たる忠真
か勢是を見て 有村三郎兵衛尉武清を先として楠牟礼谷に備を設け 互
に勝負を命にかけ名を惜ム勇士等 分くの敵に相當り 馬煙、天を掠
鯢の聲（オ）地を動し挑戦ふ といへはひとしく電矢を飛せるのこと
く 各争ふといへともあいしゆの力ら 味方の勢發靡て 東霧嶋をさ
して曳退く 忠真か兵是をみて下知せしは 敵の勢四度路に見へたり
何までも追詰て洩さすかて と呼り追掛 揉合せんと匂りける 味方の
勢も返し 合せ 討死するもの多かりける 瀬戸口の渡にて山内早太義賢
討れぬ 竹ノ井小左衛門尉（ウ）秀義は遙に落延たりしかとも 義堅討る
、と見てければ かねてよしみや深かりけん 引退して打死す 其外財
部筑前守盛門 津曲三十郎兼喜（オ） 椋田久造綱俊 大野与左衛門尉
乙守賀兵衛尉頼重 斉藤惠斉皆敵兵に相交り 白刃に身を破られ 処々

にて討れにけり か、りしかは味方の勢長尾越を登り東霧嶋へ引退しに
強敵猶きおひ進んで（オ） 東霧嶋二王門迄一息も休す追詰たり 爰に而
味方の軍勢も さのみはいかて引へきそ と二王門に相支へて 爰を専
途と防き戦ふ 抑金剛佛作寺は霧嶋山東門にて 真言秘密の道場也 性
空上人の再興に而護摩法修煉遺蹤 其寒灰今や石と成り煙薫して岩を染
神功妙用の靈場なれとも 修羅鬪諍の阡となれば 梵音已に断て戦
鼓（ウ）忽天地を動し 末世濁乱の故といへとも か、る干戈の鬪逆 争
佛神三寶も納受の心あるへき と神慮も闇に計られける か、る処に敵
の勢三拾騎計り真驀に責入処を 大川原仲兵衛尉義信鉄炮を放ち 先に
進む騎馬武者の真甲を射たりければ 脳を破り骨を碎て後につと通りけ
れは 馬より真倒に落て死にけり 時に築地内藏之助弓に矢取て打つか
い（オ）しはしかためて確と放つ矢 中間の高股を矢先（オ）白く射通しけれ
ば 是も矢庭に踏れける 去共味方無勢にて 已に責破られけんや見
得し処に 上の陣よりこれを見て 敵の後に断間あり 政所の伏兵を起
し合せ 後を包みて一騎も残らす討とれ と匂て数十騎打て出たりけれ
は 叶わす と我先にと引退く この時味方の軍勢にも討る、もの多
（ウ）かりけり

志 和 池 軍 の 事

八月十五日北郷善左衛門尉久陸 小杉丹後守（オ）は東條能登 同丹波を
案内にて 東霧嶋より打て出 志和池の城へ押寄 味方の勢を二手に分
ケ 一手は木の川内 瀬戸口の渡より永谷原を過 丸谷 万太郎渡りに

て射殺せり 此れより寄手の氣撓んで立足もなく敗北して⁽⁴⁶⁾ 這々命を助る者あり 是非なく⁽⁴⁷⁾ ものもあり 角て繩瀬の関所はいよく⁽⁴⁸⁾ 堅固に成りにける

山口直友下向事 附繪圖御献上の事

扱も内府家康公は遙に西国の乱を聞召れ 山口勘兵衛尉直友 与力和久甚兵衛尉を以⁽⁴⁹⁾ 西国へ下し給ふ 兩人西海の浪を凌九州の地入 内府公の御詔を詳に相延らる 戦場の行萬怠慢あるべからず⁽⁵⁰⁾ 与矢根二千 御書とひとしく家康公より賜りける 御書に曰く

御下以後不申入候間 以使者申候 仍伊集院源次良于今城拘申由承候 為御譜代家人身ケ様之儀 為自今以後候間早々御成敗尤候 雖然無聊尔人数等無異儀様ニ被仰下肝要ニ候 委細之儀使者⁽⁵¹⁾ 口上ニ申候条令省略候 恐々謹言

七月九日

家康御判 薩摩少将殿

御下國以来就御見廻不被申 以使者被申入候 次⁽⁵²⁾ 縮緬百端 帷子百矢根二千被進之候 誠⁽⁵³⁾ 御音信迄ニ候 然者伊集院未居城ニ楯籠候之由於内府無御心許被存候 于今⁽⁵⁴⁾ 不致下城候者 早速御成敗候様被存候 御人数等何時成共 御用次第可被申付候 雖顯直礼候 猶拙者可申入之由候 委細者山口勘兵衛尉可申上候条不能具候 恐惶謹言

伊奈函書頭

七月九日 薩摩少将様

今成判

忠恒公も山田の城攻落し給ふとひとしく 味方の勝利を註進のため⁽⁵⁵⁾ 庄内の繪圖を調へ 喜入大炊介久正を以て伏見へ献せらる 久正則國を立て 七月の中旬に城州伏見に上着し 井伊兵部少輔直政に倚て高覽に備へ奉る 家康公御感悦あり⁽⁵⁶⁾ 大炊介を召出され 繪圖の面を御覽あり 庄内の躰たらく久正委⁽⁵⁷⁾ 演⁽⁵⁸⁾ 説⁽⁵⁹⁾ すすへし とそ仰下されける⁽⁶⁰⁾ 大炊介敬て要害の躰たらく 城の廣狹 地險難 川の淺深 敵の多少 兵糧の運送まで委細に言上してければ 家康公聞召れ 誠彼等は強敵也 地の利を得たる事なれば 急に掛て攻へからず 月を重⁽⁶¹⁾ 日を重は長籠城に退屈し 明年の季春にはおのれと落去せしむべし 忠恒は若武者なれば 鹿忽に働も多かるへし 義久尤武略に老たり 萬秘⁽⁶²⁾ 計を加ふへし⁽⁶³⁾ 小敵とても侮らされ と委細に仰含られ 御返翰を賜り 御暇たもふてける 久正則薩摩に下り 有増言上し 御返簡を奉⁽⁶⁴⁾ 其詞にいわく 六月廿四日之御状 一昨十日參着 令得其意候 源次郎先手之もの籠置候城 即時⁽⁶⁵⁾ 攻破百余人被打捕之由 誠以潔儀⁽⁶⁶⁾ 候 弥無御油断御行尤候 定而源次郎居城も程⁽⁶⁷⁾ 有間敷候 乍去人数等不⁽⁶⁸⁾ 損様被仰付可然候 尚御吉左右待入候 恐々謹言

七月十六日

家康御判 薩摩少将殿

のこゑを挙て進まれしは 類もあらしと見へたりける 大将已に討れければ 残黨機を失て一支もさへす 城は忽落去せり 討取所の敵の首三百余とそ聞へける 味方にも田実藤内を始若干の兵討死せり 三時餘の戦なれば 死人ちまたに壘くとして血は涿鹿の川と成 紅波楯を流せは屍は屠(ウ)処が肉を積んで 白刃交りて骨碎有様は無暫共餘あり 此日討取敵の首 吉祥院の上にして一所にこれを埋みしに ころしも九夏のころなれば腐壞して その塚忽ち破れけり 去程に忠恒公東霧嶋の御陣には北郷の手勢 御方の御勢残し置せ給ひて 御陣を山田の城にぞ移させ給ふ 手合の合戦に敵軍難なく亡び 事はしめ血まつりよしと 味方は弥勇ける

恒吉 城開退の事

同日嶋津圖書頭忠長 桃山権左衛門尉久高 柏原将監は伊集院宗右衛門尉が楯籠る恒吉の城を囲て 明れは廿四日迄混攻に責ければ 城中の敵兵共叶がたきとや思ひけん 同二十五日の夜 宗右衛門を始として皆悉城を捨テ都城へそ退ける 夫より直に末吉の城を囲んで鉄炮を揃へて射たりけれ共 はかくしき軍なければ 又恒吉 松山に陣とりて 都城の後詰とぞ議せられける

蛭ヶ嶽 伏兵の事

山田の城早速攻落されしかは 方々の凶徒驚 是を前車の誠として 同廿四日より処々の要害稠しくして 皆城戸を堅て楯籠る 爰に北郷長千代丸東霧嶋在陣の間 家臣等薩州祁答院より替ルく在番せしかは

安永の城に籠居たる忠真が逆徒等これを聞いて いさや 宮之城通路を遮り 往(ウ)還の者を討留んと 蛭ヶ嶽と云処に密に兵を隠し置て 往來の敵(もの)をそ相待ける 然るに同月晦日味方の勢祁答院へ帰りけるを 件の伏兵一度に起し合 縦横無尽に揉合けるゆへ おもひよらざる味方の急難なれば 手を碎き戦ひ防くといへとも かねてはからざる事なれば宮越甚兵衛尉正秀 長野藤兵衛尉通堅等 敵中に突入て 名を(ウ)一戦の功に留メ 骸を野けいの露に晒し 勇士の本懐を叢庭にそ遂たりける

倉野七兵衛尉戦死の事

其ころ高原の内繩瀬と云所に関所を居て 入來院又六重時の手勢これを警固したりける 山之口の城主倉野七兵衛尉かの関所を破り 直に東霧嶋に攻入らんと相議し 潜に手勢を引卒し 石山寺の後なる(ウ)星原川内を打通 田尾に出て繩瀬川惣の渡りを掛渡し 水湧に攻登る 重時の軍勢此事を聞とひとしく 味方の勢を二手に分て 一手は天神山に隠し 残る勢は迫戸の内に伏居て 倉野か勢を待居たり 山之口の勢共は 関所を一時にもみ破らんと ときをあげて責入ける 迫戸の伏兵爰を専度と防ぎ戦ふ 敵と味方をくらぶれば 九牛が一毛にも(ウ)及がたき小勢なれども 上野石見と竹の下清右衛門尉と命をみぢんより輕し多勢の中に突掛て面もふらす戦ける 天神山の伏勢 時分はよしと心得けん 敵の後を遮りて 一度に叫て突かゝる 奇手多勢たりといへとも 前後の勢に揉立られ 大将倉野七兵衛尉は水湧にて丹波某鉄炮を放

平田与吉 鈴木宇左衛門尉 法元右近兵衛尉 市木孫右衛門尉 鹿嶋
 介三郎 伊集院九郎兵衛尉 鎌田四良左衛門尉 毛利覚右衛門尉 吉利
 覺右衛門尉 八木丹波守 春田主左衛門尉等を始め きしん金鉄の鋭兵
 其勢凡十萬余騎 山上山下に陣屋を列て 尺地寸土も明所なし 爰に北
 郷長千代丸今年僅十^(ウ)歳なれば 伯父作左衛門尉三久長千代丸を輔佐
 して 数千騎の兵を卒し 祁答院を打立 真幸院飯野を過 東霧嶋に參陣
 す 相従ふ一族には北郷休次郎久村 同善左衛門尉久陸 同吉次郎久延
 同吉右エ門尉久明 同次兵衛尉忠總 同新吉郎久規 同主殿介忠持 同
 四郎左衛門尉久武 同勝兵衛尉忠辰 同小次郎忠泰 同仙次郎久種 同
 文右衛門尉久吉 同伊助久満 同又五郎久根 同源⁽³⁾左衛門尉久観
 同伊右衛門尉久元 同左京進 同孫市久永 神田左京進忠純 末弘河内
 守 他家には小杉丹後守重頼 土持撰津守忠綱 同吉右衛門尉正綱 同
 三四郎 根占清右エ門尉 津曲太郎兵衛尉兼親 同狩野介兼業 小杉孫
 右衛門尉 同彦三郎 財邊筑前守盛門 亀沢佐吉秀信 落合刑部少輔兼
 堯 新納宮内少輔 和田民部匡郷 木田内蔵介親幸 山田大膳亮忠常
 知覽^(ウ)三河守入道 同兵太久縁等を初として騎馬歩卒悉く これをしる
 さす 十萬余騎の軍勢太守公の御陣を守護して 命を塵芥よりも輕し
 名を千鈞金玉よりも重ずるは いかなる堅甲利兵をも碎きつべし とそ
 見へたりける

山田城没落の事

同廿三日(慶長四年六月廿三日)卯之刻計の事なるに 朝霧未晴さる

に⁽⁴⁾東霧嶋の御勢旗の手を下して 山田の城⁽⁵⁾責近つく(押寄る) 大
 手の大将嶋津中務太輔忠豊は長千代丸の家臣木田弥左衛門 関屋豊前
 岩満利右エ門三人を案内の爲具せられたり 新納武蔵守忠元入道拙齋は
 森淡路 多田伊賀 塚田式部を具せられ 村尾源左エ門松清は筑⁽⁶⁾内蔵
 助 乙守筑前頼候 釘村源右エ門尉重清を案内のため鎧をたにも着せず
 城の野首荒神か尾^(ウ)より攻登らる 搦手の大将は入來院又六重時
 なり 大手搦手相圖を定 吐氣を挙て攻寄る 城中にも長崎久兵衛尉
 衆兵に下知して防ぎ戦ふ 忠豊 忠元 松清三手の勢と重時の搦手の勢
 と一同にせめ戦へは 矢叫の音天に響き 汗馬の蹄地を動す 卯の刻の
 始より午の終まで息をも継す責戦ふ 忠豊の旗差大手の口に攻掛しに
 城中の兵ともかの⁽⁷⁾旗印を奪取 城の上にそ差揚たり 是を見て味方
 の勢 すわや 忠豊先登よ⁽⁴⁾と心得て我後れしと進争ひ^(ウ)いと、おめき
 さけんで責入ける 時に大川原仲兵衛尉義信と阿久根孫兵衛尉良繁と
 と名乗りて真先に進て城の屏に攻登る 去れとも城内の敵兵 大軍の責
 挙るに恐て敢て近くものもなし 義信敵するものに向⁽⁸⁾が如く聲をあげ^(ウ)
 刀を振ふ事 電光のけきしてききたるに異らす 郭外の寄手こ
 れを見て あつばれ⁽⁹⁾剛の者の働を見よ と一同にこそ讚⁽¹⁰⁾にける 城中
 の敵兵共 城戸の口に支へて命を限りに防ぎける されとも競進んたる
 大勢なれば少も猶豫す 無⁽¹¹⁾武無三にせめ入ける 故に城主永崎久兵衛
 加番中村与左衛門 大手の口に而討れにける 忠元入道拙齋は老武者に
 而行⁽¹²⁾歩も意に任せされは 只塵取に昇のせられ 一番に責入⁽¹³⁾とき

またたとり付 爰にて数日の飢を休め 亦宮の城へと趣き 荒猿を説け
れは 数度の勲勞浅からざる忠廉也 と讃ぬ人はなかりけり かくて忠
真謀反の事近国他国にも露頭せり 庄内近隣の(ウ)城主皆要害を構へ

軍勢を催促し 太守公の御進發を待奉る人々には志布志 桃山権左衛門
尉久高 松山に柏原將監 申良に嶋津圖書頭忠長 廻に山田弥九郎有栄

高原に入來院又六重時 飯野に伊集院元巢 中原中将坊 野尻に敷根
仲兵衛尉 穆佐に川田大膳亮 須木に村尾源左衛門尉入道松清 小林に

上井伊勢守 同次郎左衛門尉入道傳齊 同仲五 大口に 新納武蔵守
忠元 かくの如く四維八紘に 族を磨楯を剃て 大守公の御出馬を 今や

おそし と待れける
忠 恒 公 日 州 御 進 發 の 事

慶長四年六月上旬 薩摩少將忠恒公日州の凶徒御征伐の為 薩陽鹿尼
府を立せ給ふ 大道は已に逆徒に塞かれ 往還更になければ 霧島の麓

(ウ)なる勢田尾越にかゝらせ給ひ 東光坊へ御參詣有 爰にて暫く御休息
あり それより東霧島金剛佛作寺を御本陣と定給ふ 相従ふ人々には嶋

津中務大輔忠豊 新納武蔵守忠元入道拙齊 村尾源左衛門尉入道松清
入來院又六重時 島津右馬頭征久 種子島左近將監 上井仲五 敷根仲

兵衛尉 川田大膳亮 島津下野守久元 肝付半兵衛尉 阿多長寿院 中
原 中將坊 平田民部左衛門尉 米良主水重隆 同舍弟縫殿介重供

山鹿弥助 平田太郎左衛門尉増宗 市來小八 相良新右衛門尉 本田兵
右衛門尉 同神右衛門尉 比志嶋紀伊守國貞 伊勢兵部少輔貞昌 三原

諸右エ門尉重種 嶋津河内守忠陪 白濱次良左衛門尉 同助七 町田藤
兵衛尉久幸 喜入撰津守忠政 鎌田出雲守政近 額娃彌一郎 吉利李右

衛門尉 島津藤四郎 村田 (ウ)刑部大輔 岩切雅楽 鎌田玄蕃 平田阿
波守 桂民部少輔 根占七郎 嶋津源七郎 濱田民部左衛門尉 佐多六

郎兵衛尉 黒田善兵衛尉 吉富弥市 上井伊勢守 同次良左衛門尉入道
川上源三郎 佐多太郎次郎 新納新八 比志嶋宮内少輔 伊集院肥前

入道 町田源左衛門尉 菱刈半右衛門尉 喜入吉兵衛尉 肥後長次郎
仁禮小吉 新納尾張守 大田吉兵衛尉 川上又左衛門尉 同性十郎左

衛門尉 同性四郎兵衛尉 大島孫太良 高崎弥六 弟子丸右京 村田
三郎右衛門尉 葉丸壹岐守 相良勘解由 鎌田加賀守 有馬次郎左衛門

尉 猿渡新助 本田次兵衛尉 鮫嶋筑右衛門尉 伊集院助右衛門尉 黒
葛原団八 野村但馬守 谷山宮内左衛門尉 東郷休半 吉利久兵衛尉

町田甚兵衛尉 伊集院長次郎 山田弥九郎有栄 野村宮内少輔 北原土
佐守 高城孫右衛門尉 種子嶋二郎 (ウ)右衛門尉 有川七郎 讚良善助

押川郷兵衛尉 久保七兵衛尉 宮之原秋扇 本田隼人 国分丹後守
寺山四郎左衛門尉 本田出雲守 同兵助 築瀬兵右衛門尉 松崎采女

指宿采女 久永吉左衛門尉 加治木兵太左エ門尉 大山稻助 児玉新四
郎 吉利左近 丹生介左衛門尉 伊地知四郎兵衛尉 同彦七 吉村善兵

衛尉 川上藤右衛門尉 野村市右エ門尉 有馬喜右衛門尉 入佐介八
野村才右衛門尉 東郷十右エ門尉 市木 七左衛門尉 小嶋源七 伊
地知彦八 肥後与左衛門尉 四位丹波守 吉田大蔵 川越民部右衛門尉

躰を案するに 罪もなき北郷の家臣を理不尽に誅せん事は 鹿忽の至りと云つへし 暫く召取て 事の實否を糺さんにはしかし と掃部介を諫ければ 皆此旨に唯諾して さらば築地を搦捕 とそ下知 す 彦三郎是を聞 我において秋毫の先ほどもあやまりなし 繩を帯とも恥辱にあらし 其に何^{それ} (ウ)の難き事やある とて手から繩を身に繞て掃部助に面はくす 角^かていましめらるゝといへとも 色を悟られては 叶はし と打解たる躰にして高髀^{たかひ}に臥いたる心の中そ不敵なる 是を見て敵の兵とも 實誤なき者そや とさゝめくものそ多かりける 兵とも具して志和池に至り 警固稠敷付置 廿日餘りそ候ひける 此事祁答院に聞へしかば³ 重て木田弥左衛門尉に仰付 志和池の城下に忍入 世の風躰を見聞すへし と亦庄内へそつかわさる 志和池は彼か故郷なれば 案内は暗からず難なく志和池に忍入 番の者臥いたる間に 彦三郎か居たりける壁に口をおしあて、 彦三郎は患なきや 木田弥左衛門尉検見の為に祁答院より來しそ と小聲に成ていひければ 築地答ていひけるは 我身は何そ⁴ (ウ)別義もなし 不日に此元許容を得て再御目にかゝるへし 弥忠真逆意の事疑なし 帰て此旨申されよ と委こそは語りける 弥左衛門打諾 必命全して時の至を待れよ と祁答院へそ帰ける 日を経て築地彦三良も咎なき身と成しかは 鰐の口を免て全く祁答院へそ帰ける 扱も渠か妻子ともは三山に居たりしかは 彦三郎は庄内にて誅せられし と聞しかは せめて^{3,2} は其教養 とて僧を請して花香をねんし佛事を當折節に 彦三郎歸來り妻や子供の悦 王質か仙家を出張望か

故郷にかへり七世の孫に逢けんに異しと思れす 夫より直に築地はまた宮之城に參して 見聞する処の分野 謳歌の説に至まで審にそ披露せり 長千代丸感悦斜ならず かれらか勲功莫太なり とて直に名ヲ内蔵助と改賜とかや 又岩満 (ウ)兵部左衛門は朋輩の危難をすて 我身一人にけ帰ル事不忠不義の者也 とて則死命を賜ぬ 其後内蔵助を召て 汝多日の勲功勝て計かたしといへとも 今一度庄内に至て委細に見聞して來れ と木田弥左衛門を添られしかは 兩人異議に及す領掌して 則亦宮之城を立 夜中に志和池に着にけり 堂領と川牟田との間にて人音のしければ あはや 伏兵の有けるそ と³ 竹の茂みの堀の中に忍て世間の躰を窺へは 案のこたく式三拾人藪之内に居る躰なれば 一ト先爰を立去へしと 虎の尾をふむ心地して 勝岡の城江ぞ趣ける 角て城下に忍入 要害の躰を窺ひしに 敵や是を覚りけん 貝をふき勢を集メ 城中殊騒動せり 不意に怪られなは陳すること叶まし 一ト先在家に火を放ち 煙りの紛れに落行ん と餅原の在家江 (ウ)忍入 木田は廐に火をかくれば 築地は倉をそ焼立たり これをみて勝岡の勢共餅原へ馳集ル 其隙にかのもの共は高城さして落延ぬ 樋掛と云処にて夜もし□／＼と明にけり 昼は人目も繁ければ 見咎メられてはあしかりなん と藪之内に隠居て 其日の暮を待居たり 然るにかの二人口中に飯を絶事久しけれとも 敢て食する物もなし 喉乾かは塩となめて^{3,4} 漸其日を暮しけり 庄内籠城は已に一決しぬと覚て 処々の用心堅固なれば忍入事も心に任せす 祁答院にたち帰り此旨を申へし とて兎や角して三山

つゝ、ゐて末吉城 又東に當て梶山 勝岡 山之口と志和池 野々三谷
 高城 各二里を隔て城く三里を去らす 乾に當て山田 安永 此の如
 く十二の砦都城を挾て後攻をなすほとならず 左右なく寄手攻ん事は計
 難そ覚ける 故に源次郎都城に楯籠て 城戸逆茂木を堅固にかまへ
 祁答院」(ウ)左近 東郷彦右衛門尉 田原勘右衛門尉 葉丸四郎右衛門尉
 東八郎兵衛尉 伊集院新右衛門尉 小川伴助 内村半平 奈良原清八
 上原肥前 同清右衛門尉 上村奎之助 上原仁右衛門尉 中條介八
 上野團助 東勘右衛門尉 北郷与右衛門尉 白石太郎左衛門尉 中村吉
 右衛門尉を初として宗徒の勢を籠りける 高城には比志嶋式部少輔義智
 入道清庵 同彦太郎 同久次郎 小牟田清五右衛門尉」(27・オ)山之口には倉
 野七兵衛尉 樗木主水 同堅介 勝岡には伊集院如辰入道 朝倉十助
 中俣玄蕃 志和池には伊集院掃部介 春成入道一忠 園木治右衛門尉
 山田には長崎治部少輔 同久兵衛尉 中村与左衛門尉 野々三谷には有
 屋田大炊左衛門尉 古垣入道従才 同与兵衛尉 安永には伊集院五兵衛
 尉 同如松 白石永仙 中山平太夫 財邊には伊集院神吉 猿渡肥前
 守」(ウ)恒吉には伊集院宗右衛門尉 瀧間平太 梅北には日置吉左衛門尉
 同覚内 渋谷仲左衛門尉 築瀬某 梶山には野邊彦市 同金左衛門尉
 谷口丹波 同伊豫 末吉には忠真か弟小傳次 伊集院兵部少輔 川崎
 源太夫 大始良八郎左衛門尉 以上十二の砦を構 閏三月廿日より庄内
 と廻との通路を差塞 伏兵を処々に置 是より往來断絶して商價の往去
 する便もなかりけり」(28・オ)況や士卒行旅の者においておやといへり

忍を庄内にいる、事
 しかるに庄内は北郷氏の本領にて 地の形勢城の要害皆彼臣の諳する
 処なれば 籠城の實否要害の躰たらしく窺見すへき其為に 長千代丸老
 臣北郷源左衛門尉久観 同善左衛門尉久陸 小杉丹後守重頼 土持撰津
 守良綱一^オ等家臣 則築地彦三郎 岩満兵部」(ウ)左衛門尉彼等二人に下知
 して検見の為につかわしける 兩人則宮之城を立出て流石忍の兵なれば
 あやしめられては叶ふましとて 尋常の風情にて庄内にそ趣ける 爰
 に水流船戸村に黒木与一兵衛とて筑地か舅ありければ 彼家に身を寄て
 世の風説をそ伺ける 何者か告たりけん 志和池の城主伊集院掃部介
 此事を聞とひとしく 与一兵衛か館」(29・オ)を困て 北郷の家臣とも此処に
 來る事 案内検見の為なるへし 速に其旨白状すへし とそ匂ける 築
 地は陳するに道も有 先岩満を落すへし とて夜半に紛て岩満を鳥越の
 方へ落しける 今は意やすしとて与一兵衛走出 さん候 築地は某聲な
 れは聊不審候はし 今一人は忽ち行方知らず出去りぬ 只今のほと見へ
 されは未遠はよも去らし 荒瀬の方へそ趣けめ」(ウ)築地はこれに候 と
 そ答える 去は 追付搦捕 とて早業の兵を勝て 荒瀬の方へそ向わせ
 ける 岩満は引ちかへて鳥越の方へ落ければ 追手の兵も到らず 祁答
 院へそ帰りける 掃部介か追手の兵は荒瀬の方へ走り散て 岩満を慕と
 いへとも益なふして 猶与一兵衛か四面を囲み 弥問者に決定せり 築
 地も黒木も共に伐て後日の誠にあわせん とひしめきける」(30・オ)かゝる処
 に東條丹波と云は物に馴たる大夫なりしか掃部介を制していわく 事の

北原 註進 事付 忠真 議定 事

源次郎忠真は一族等を差招て 我身は逆臣の⁽²⁾嫡子なれば争三族の罪にもれん 迎も遁^レ命をは惜に甲斐もあらざらん 只都城に楯籠

運を究に合戦し 十死一生の勝負に任^すべしとて一族家臣を相招く^く 北原治部左衛門は其比薩州伊集院に居住せしかは 聊議すへき子細あり

とて使者を立て催促するに 北原答て曰 早速馳参へく候へとも 此^ころ病に侵され身躰意に任せず^す (ウ)平愈せは時刻を移さず走参すへくと

そ答ける 忠真再三使をはせて頼に招^いも 北原敢て應諾せず さて^まはかの者味方を背と覚たり 潜にかれを打果さんと相義し手勢を出と

聞へしかは 北原是を聞とひとしく 悪逆の徒黨に組して何の益か有へき とて夜中に鹿兒城へ馳参し^て 比志島紀伊守國貞に倚て 忠真か逆

心を 審^つ訴ける^ら (3)太守公聞召れ 先事の實否を正へし とて 源次郎忠真速に出仕すへし と御使節を下されしかは 忠真一族家臣を集

此事如何あるへき と満坐の評議を問ければ 衆評區にして決かたし^く か、りける処に本來産土は紀州和哥山 根來寺の法師なりし白石永仙

と云もの 法衣を纏身たりといへとも 一向に武勇に鍊磨して兵術を旨と (ウ)せしかは 前忠棟家臣として今も又衆會の坐席に居たりしか 進

出て申けるは 今此^時に至て鹿兒島へ出仕有ん事は 偏に石を抱て淵^に入 薪を負て焼野を過か^らことし 所詮都城に楯籠り 庄内十二の城を

構へ行を以て戦んに 勝利を得ざる事の候へきや さあらは亡父幸侃も 娑婆の望念晴れ 眉を黄壚に開かるへし 若も運命尽果⁽²⁾なは城門を

枕にして 永く勇士の名を残さんに何の残念か候へき と憚処なく申けるを 伊集院新右エ門尉暫く思案して申けるは 此儀尤然へく候へとも

退て愚案を廻し候に 幸侃こそは非義の罪に陥り逆臣の名を得給ふとも 忠真それに齊しからずは天道争か捨給ん しかるに此理を辨す 譜

代相傳の主公に向て弓を挽矢を放んと欲する事 木 (ウ)陰に居て枝を折り流を汲て源を濁に似たれば 利運を得ん事はかたかるへし 詮なき謀

反を企て 不忠不義の悪名を末代に留給ん事 口惜き事ならずや 殊^ニ太守の御勢に味方の勢を比すれば 大海の一滴^キ塵りを積て山となすに

異ならず 是誰か知らざる 忠真は誠にまさしく少将忠恒公の御妹聲也 いかてか別義の候へき 只然^ルへくは運命⁽²⁾を天の照鑑に任せ給ひ

御出仕あれと存也 是御家長久の便ともなり候はずや 面々如何思召候そ と理非分明にそ申されけれども 忠真を初一族郎等みな永仙か義

に服して 只籠城にそ極りける 忠真 籠城 付 十一 砦 構 事

去程に忠真一味の軍兵を集め 一七日の間自ら立て酒を盛 一味同心の族二萬人 輕兵歩 (ウ)卒に到^ら まで契約を堅 所々の手分をそ

したりける 抑都城と申は十二の城郭其中央にして 東南に川流あり 西北は平野につ、くといへとも 谷々犬牙の如く入違ひ 掛引自由なら

す 西の大手計こそ馬の足立快し しかれ共 一里隔て財邊^邊の城そひゑて峨々たり 寄手都城を責近は 後攻をなすに自由也 西南五里を隔て

は (6)隅州恒吉の城有 南方に梅北城あり都城を去事一里 夫より南に

けるは 幸侃は謀反の大罪に依て誅伐を加ふといへとも 妻子并一族家臣等何そ其罪にひとしからんや 構て遺恨を挾間敷由 委細を仰下されければ 忠棟か妻子家臣を卒て 別涙を押へなから東福寺の方へ立去ける か、りしかは直政も則帰參せられける 其後少将忠恒公(18・才)此事を思召に 罪を伐し功を賞するは国家の令とはいひなから かれ已に太閤公の御朱印を帯せる者なれば 私の怨を以て誅戮を加ふる事 道を背に似たりとて 速に城州高雄山に御宰居あり 其罪を請給ふ 忝も家康公五大老と相義せられ 忠恒公の罪をなためらる 則伊奈圖書頭にて 早く伏見の本館へ帰住あるべきの御詔有(ウ)且不意の變やあらんと 騎馬の勇士數十人北野邊まで遣され 路次の警衛をなさしめ給ふ内府公の御懇情浅からざる処也 其のち又家康公 寺沢志摩守を以忠恒公へ仰下されけるは 定て逆臣の殘黨等 忠棟か長子源次郎忠真を將として 本領に楯籠り 仇を報んと工らん 速に国に下てかの殘黨を鎮へしと栗毛の御馬を(19・才)給けり 此馬俊足なりければ 合戦の時に至て忠恒公召れけるとかや 鳥津中務太輔忠豊も 急に下て忠恒と相儀してかの逆黨を征すへし とて御暇を給りければ 則伏見を打立 西国へ下向せらる 其外宗徒の人々夜を日に繼て馳下り 軍の評議嚴重なり

忠真 大川山遊獵の事(ウ)

去程に忠棟か妻子 幸侃誅せらるゝと等しく 庄内に在城せし嫡子源次郎忠真へ事之よし告送る 彼使脚を飛 同月廿日の早天に庄内に着にけり 折節忠真はかゝる事とは夢にもしらす 我領財邊大川原山に閑狩

して居たりしに 老父已に伏誅よし 都城より早馬にて告來りしかは 忠真大に驚嘆して 取物もとりあへず馬を飛せて馳かへる か、りしかは(20・才)一族家臣 こは何事の出来 と驚き騒者もあり 其後幸侃伏誅の事庄内に露頭せしは 一族宗徒はいふに及す卑職凡下に至まで 我先にと馳集り 其勢雲霞のごとく也 先都城を守築して 籠城の行様(ウ)也 去程に鹿兒島にも 定て忠真籠城して警を報とそ企らん 一業所感の者共が自滅を招にてこそあれ 欺に安かりなん 只とにかく(ウ)に計かたきは 野心の内通の輩あつて 味方 方便通もゝるときんは 却て敵の便りと成 これそ勇士の遠慮也 とて尋常に近侍して御内談の輩も 聊別儀を存せざるよし 一紙の誓文を呈して 高覽に備奉る

起請文

此度幸侃御成敗二付而 種々御談合之出合(21・才) 於御隱密者毛 頭洩間敷候 始伊集院源次郎縁者親類雖有之 到庄内曾政致通用間敷事 右之旨令違背者ハ

ト書て 熊野牛王に 神明を記し天神地祇を敬かしめ 神罪立処可罷蒙者也 慶長四年閏三月三日 新納武蔵入道為舟 相良新右衛門尉長辰 比志島紀伊守国貞 鎌田出雲守政近 喜入大炊介久正 山田越前(ウ)入道利安 休閑齋旅庵 平田太郎左衛門尉増宗 伊集院下野入道抱節 樺山権左衛門尉久高 町田出羽入道存松 桂太郎兵衛尉忠詮 北郷作左衛門尉三久 上井神五郎里兼 田代甚助殿 阿多神左衛門殿へ と書て各判をそ居られける

を含て則退出したりける 扱も少将忠恒公は障子を隔て聞しめし 先三
 成の懇切を謝して立かへらせ給ひける 所謂大行の路能車を摧人心に比
 すれば此夷途也 三峡水能 船 覆人心 比すれば是安流也 とは
 かゝる事をや 頼ても頼かたきは傾刻變化人心とかや おもわ(ウ)さり
 き忠棟入道 當家氏族の老臣にて角迨非義を存んとは かれを其ま、置
 ん事は自滅を招くに似り とて薩摩少将忠恒公安き心もまします 爰
 に北郷長千代丸は父忠虎におくれ後孤と成て 老祖父時久入道に介抱せ
 られて居たりしか 幾程なくて入道も又逝去せり 今年僅に九歳なれ共
 去年の冬より在伏見にして(1)居たりければ 忠恒公召出され 所、
 ろに示させ給ひけるは 汝庄内の本領を去て祁答院に移ル所謂は かつ
 て予が知処にあらず 是則忠棟か心中より出 殿下に訴し故也 構て我
 を恨へからず 汝を本領に帰さん事久きに有べからず 其證として得さ
 するそ と手つから正廣の宝刀を長千代丸に賜りけり 家の面目身の誉
 報謝するに言なく(ウ)則珍戴百拜して 家の重宝とせせられける 去
 程に忠棟入道暴心内にありといへとも 機を片言に顕す事 兼て倚頼の
 人々の外敢て談ずる事なければ 事のもれ易 して禍を招く端と成を
 夢にもしらす居たりけん 同三月九日忠恒公より御茶を賜へきよし
 兼て仰を蒙りしかは 常の御遊と心得て 召に應じて出仕せり(1)忠恒
 公幸侃を茶亭に請し給ひ 山海四季の珍味を調て忠棟をもてなし給ふ
 角て御會も過終り幸侃退出する処を 忠恒公追様に討せ給ふ 是を見て
 御側に候ひける別府小吉と云童 共にす んではをうつ 實にも由々敷

見へにける 積悪無道の忠棟か多年の鬱懷徒に一朝の露と消て 永く悪
 心豺狼の臣と名を得たりし(ウ)因果の道理を知らば 意有へき事共也
 抑忠棟陰謀一朝一夕の事にもあらず 其濫觴を尋れば 前太守義久公
 の御舎弟義弘公の武威九州に振ふにより 豊州の大友度々の軍に利を失
 ひ 大に士卒を減せしかは 殿下豊臣秀吉公へ援兵を訴ける故 去ぬる
 天正十五年の季春 前関白季吉公自ら二十余萬の兵を催し 九州(1)御
 進發の由きこへければ 忠棟は日州の守禦として 衆兵を卒して向ひし
 か 羽柴美濃守秀長の十万の勢と相戦ふに 兼て野心を挟み 諸卒に向
 て下知しけるは 今度の軍は鉄炮に玉を籠へからず と密に士卒に云含
 め 墓々敷軍もせで居たりしか 殿下の御勢利を得しかは すみやかに
 頭を剃り 一番に降参せり か、つしかは忠棟(ウ)殿下の覚斜ならず 庄
 内の地八萬餘石の御朱印をも給ふてける 其外泛々の事共は計に暇な
 し 角て幸侃庄内を一同に掠し後は 弥栄花 身に餘 酒宴遊興のみ
 事として 其間是一向に君を犯し奉り 國を奪ん事をのみ朝暮にむねを
 焦しけめと 後にそおもひしられたり 百年の樂こ、につきて三族の罪
 一身に帰す おもふに(1)夫神明の三成の口に依託して 忠棟か陰謀を
 しらせ給ふなるへしと 貴となく賤となく奇特の思ひをなしにける
 忠恒 公 高雄 山 御 牽 居 付 西 國 御 下 向 事
 此事家康公聞し召れ 残黨讎を報んと企ル事も有ぬへし とて井伊兵
 部少輔直政を差遣され 警衛をなさしめ給ふ 忠恒公御感悦不斜(ウ)則
 川田大膳亮 吉利左右衛門尉を以 忠棟か妻子并一族郎従等へ仰下され

角世の中の移り替る事も 只幸侃か一心より出て 其身は庄内を領せん為に 若干の人を轉動せし謀計の程こそ恐しけれ 時久入道一族を拂て都城を開退の後は 則彼本領を忠棟一円」(9・オ)に申賜のみならず 廻り市成 百引 平房 内之浦 大崎等を相添て 都合八萬餘石をは忠棟へ下し賜ふよし 殿下豊臣秀吉公直の御朱印を頂戴せり かゝりしかは同八月隅州鹿の屋の城を去 庄内の地に移り都城を居城として 恰も石崇耳寧がむかしの柴花に異ならず 權威弥つものり来て 國中偏くかの下知に随はずといふ処もなく 諸人挙てその」(ウ)権に服せずと云ものなし 誠哉 貧して諂ざるものはあれとも 富て驕ざるものはなし とは古賢の傳へし言の葉也 かの入道か奢侈を聞ては 国家の物そふ遠にあらし と未然に凶を鑑て 眉を顰る族も多かりけり 角て慶長二年の春より忠棟入道在伏見の間 五人の宿老 安藝中納言輝元 會津中納言景勝 備前中納言秀家 加賀大納言」(10・オ)利家 江戸内大臣家康 石田治部少輔三成 増田右衛門尉長守 浅野彈正少弼長政 徳善院玄以法印 其他殿下の近臣に様々の賄賂を納て密に 薩隅日三州守護職を忠棟預り候はん と秀吉公に訴ける 然といへとも三州は 嶋津の元祖忠久 領職頼朝卿の封書を受て 嫡々相續て拾八世 譜代相傳の国なれば 流石」(ウ)理不尽の訴を如何でか左右なく御許容あるべき 事速に決すして同三年八月十八日前関白秀吉公 春秋六拾式歳にして伏見の城に薨し給ふ 然し後は秀頼いまた御幼稚ゆへ 秀言公の御遺言に任せ 内大臣家康公幼君を輔佐して 天下の政務を沙汰し給ふ 其比嶋津兵庫頭義弘公

同又八郎忠恒主は 前大樹秀吉公の命を受て」(11・オ)去ぬる文録年中より朝鮮国に渡海まし 数度の軍功他に異なり すでに朝鮮の軍はてしかは 慶長三年十二月我朝に帰帆し 直に城州伏見に至り 翌年正月九月御感状を頂戴し 且義弘公に正宗の刀を賜ひ 息男忠恒主少將に任せられ 長光の刀を賜りてけり 士林の誉世の覚 誠に由々敷事共なり 同二月下旬の比忠棟」(ウ)入道か陰謀の事 石田治部少輔三成より密々に注進せられけり 然といへとも忠恒公 譜代相傳の忠棟かゝる不思議を企べしとは 露の思召もし給す いかてか去 事の候へき と敢て信用し給す 三成重て 御疑は理也 去ながら忠棟か野心に於ては事已に一決仕候へは 御猶豫あるへき処にもあらず しかし明日我館へ入らせ給へ 直に御疑を闕せ參らせ候べし とて 翌日忠恒公潜在彼館へ入せ給ひ 一間へ忍せ給ひて 忠棟か言を具に聞せ給ひける 去程に三成忠棟を招かれけるに 運の尽ぬる駿にや かゝる事とは夢にも知らず 兼ては三成に倚てこそ太儀をも取締ふ折節なれば 召に應じて出来れり 坐席定て後 三成忠棟に問れける事は 幸侃多年の大望近き程に議定あり 事成ぬと覚也 去りながら」(ウ)少將忠恒の御事を如何計ふ方便やあるそ と懇に問れければ忠棟答て申けるは 忠恒に於ては鳩毒を盛て殺んに掌を指か如し 其期にのそまは兼てより筑後 筑前 肥後 肥前 豊後 豊前六ヶ國にも牒し合せし事なれば 我領城に楯籠 秘計を以て戦んに 勝ざる事の候へき と意底を残す語りける 蟻娘蟬を窺ふて黄雀の傍に」(13・オ)有をしらぬ因果の程こそ淺猿けれ 角て幸侃入道は心中に笑

りし其時は源太忠金とそ名乗りける 其身家老職に補し 右衛門太夫忠棟と改名し 刺殿下の覚斜ならず 當時鳥津の幕下において 世の覚時の銚肩を並ふる人もなく 国中の政道は意の儘にそ行ひける その威勢の勇々敷事は 恰も趙高か権を執て国忠か威をも欺べし 去は天道盈虧習なるにや 忠棟⁽⁵⁾意に思ひけるは 我人臣に生を受るといへとも 遍く天下の貴族にしれ 末席をも汚す身として 拙くも嶋津家の下風に立て 徒に一生を終へき事こそ無念なれ 一度小臣の名を轉して 太守の位に到らん事こそ生涯の面目ならめ と思ふ心の付けるこそ 果して家の尽へき禍の端と成⁽⁷⁾にける 頃は天正の末つかた 天下豊臣秀吉公 三韓御征伐有へきのよし 国々の⁽⁸⁾諸將へ羽檄を以て觸仰られ 文禄元年春の比 肥州名護屋へ御動坐有 我朝の諸將軍勢を朝鮮⁽⁹⁾に差向給ふ 故に兵庫頭義弘公も三州の勢を卒し朝鮮国江渡海し給ふ 右衛門太夫忠棟 嫡男源次郎忠貞を義弘公に随⁽¹⁰⁾しめ朝鮮国に遣し 我身は国に留りて 密に謀叛の計略をそ運しけるこそ恐しけれ か、つし後は 萬につき無二の忠貞を飾といへとも⁽⁶⁾ 内心は一向に謀叛結構の外は他事なし 夜は寝 密におきても只この事を計に 所詮大儀を企ん事要害にしくはなし 今北郷氏の領する処 日州庄内の地は分内廣く地の利全き所なれば 如何にもして彼処を我新恩の地となさは 且は一世の名聞と云 且は秘計の便とならん と心中に深く含んで 時々天下の大臣によつて 薩隅日三州の中に譜代宛行⁽¹¹⁾の諸士 領地 大となく小となく交替の命を下し賜ふべし と頻に訴申ける処 石田治部少輔三成の

吹拳によつて 文録四年乙未三ヶ国の諸大名 旧新の恩地を選はず悉く改易せらる 時哉命哉 譜代不變の領地をも皆此時に没収せられて 僅に一所懸命の地と称して 家を他境の土に移し 糧を遐遠の地に運 國中變異の躰為例希にそ覚ける⁽¹²⁾ 或⁽¹³⁾本領に陪して多分の領地を得る輩は喜悦の眉を開くといへとも 又本領にも應せずして僅の采地に預る者は 是を嘆き憂といへとも 台命黙止に力なし 哀樂互に替り定なき世そ轉けれ こ、に尊親は北郷前左衛門尉時久入道一雲 嫡子讚岐守忠虎 去年十二月朝鮮国にて逝去し 其子長千代丸今年僅に六歳也 せめては かれそ忠⁽¹⁴⁾ 虎か露の形見と養育して 郷に杖つく老の身も甲斐なき月日を送られしに 殿下の命により 先祖資忠より相續て今時久まで九代は 暫くも間断なく領し來れる庄内の地 都城を初として山田 安永 野之三谷 志和池 高城 山之口 勝岡 梶山 梅北 末吉 永吉 恒吉 内之浦 財邊⁽¹⁵⁾共に拾五ヶ所 凡六萬九千石一円に没収せられて 纒に薩州祁答院三⁽¹⁶⁾ 万七千石を賜りぬ 故に同年八月二十三日長千代丸を携て故郷を去て 遠方や雲井のよそに詠⁽¹⁷⁾やり 同二十六日祁答院にそ着にける 宮之城と云 処にかりそめなから家作して 暫くこ、にそ住馴⁽¹⁸⁾る 譜代の家臣一族等も共に妻子を携て すきこし故郷を跡に見て目馴ぬ里にそ住侘る 若や如何なる世にも逢 帰るうつ、のあれかしと老と⁽¹⁹⁾ なく少となく 昔を忍ふ涙の露 袖のみ濡る計也 榮枯互に地を易て常ならぬ世そたとゑなき

忠棟 陰謀露頭⁽²⁰⁾の事 付誅らる、事

- 一 忠恒公高雄山御空居付西國御下向事
- 一 忠真遊獵大川原山事
- 一 北原註進付忠真議定之事
- 一 忠真籠城事付構十二砦事
- 一 遣忍于庄内事
- 一 忠恒公日州御進發の事
- 一 山田城没落の事
- 一 恒吉城開退の事
- 一 蛭ヶ嶽伏兵の事
- 一 倉野七兵衛戦死の事
- 一 山口直友下向付繪圖御献上の事
- 一 東霧嶋軍の事
- 一 志和池軍の事
- 一 財邊軍付平田吉田戦死の事
- 一 新納^新齊詠哥の事
- 一 小松ヶ尾合戦付小谷頭軍の事
- 一 野之三谷軍の事
- 一 森田御陣の事
- 一 井樓の事
- 一 阿和井ヶ塚伏兵の事
- 一 柳川原口鎗合付小川兄弟戦死の事

一 被結間牆事

鳥津幕下本領改替の事

抑薩隅日三州は鳥津の高祖豊後藤原の忠久公 往し建久年中に鎌倉の右大将頼朝卿の封書を受 初て領知し給ひしよりこのかた 嫡々相續て十八世 暫くも闕如なく 累代三州の守護として 西域の藩籬たりしかるに建久より已降 慶長の始にいたり 星霜凡四百年⁽³⁾ 來乱逆の断る事なく 黨をたて類をむすんで国家を乱す凶徒等 度く⁽¹⁾に於て起るといへとも 一人として其夙望を達する事を得ず 或太守の幕下に降り 或他国に敗走す 是併大守の武徳の長せる所謂也 しかるに元祖忠久公より十八代の後胤 従四位下修理大夫義久公は文武兼備の良将にて 徳澤昆蟲に及ぬる上 英名扶桑に傑⁽²⁾ 出せり しかるに義久公御男子のわたらせ給^{たまわ}す 国務を御舍弟兵庫頭義弘公にゆたね 太守の任を譲らせ給ひ 御身は則御剃髮有^{あり} 御名を龍伯公と改られ うき世を餘処にそ栖せ給ふ 義弘公の御長男又市郎久保主 次^は又八郎忠恒主 いつれも士林の英材にて 父母昆弟の禮に私なく 黎民撫育の道正し かゝる処慶長年中 おもんはからざるに凶牆幄より起て⁽⁴⁾ 日州暫くも静ならず 民屋兵煙の為に敗られ 諸人干戈の事に勞す 其濫觴を尋に 時の長臣伊集院右衛門太夫忠棟入道幸侃か陰謀に依て也 抑忠棟か其のう祖を尋れば 忠久公御子大隅守忠時公の七男常陸守忠經の後胤にして 伊集院大和守忠倉か飯子也 祖父大和守忠朗入道孤舟は太守貴久公に仕へ奉り 軍功莫太也^たければ 今の忠^(ウ)棟入道も箕裘の業を相續て 少か

ㄥ (1・オ)

ㄥ (ウ)

ㄥ (2・オ)

凡 例

〔翻 刻〕

(1) 日高氏蔵本を翻刻して本文とし、その右に桂木本の校異を細字で記した。

三月六日

(2) 翻刻に際しては、異体字等をなるだけ通行のものに改めた（漢字は、

安政六己未三月六日

かなり表記に従って、カタカナ体、常用字体、正字体の別を残した）。

庄内軍記上巻 筆 □

(3) 本文は訂正された最後の形にした（都合で、ミセケチ、補入の具合は

庄内軍記上巻

示せなかった）。本文の確定が出来なかった箇所は傍書の表現を（）

で囲って、その後を示した。

上下式冊之内 みつのへね

(4) 読み仮名は全て省略した。

みつのとうし

(5) 校異は表現の異なる箇所限り、漢字、仮名の表記の違いは無視した。

きのへとら

(6) 目録の朱の書き入れは省略した。

きのとう

(7) 丁付けは^(1・オ) (ウ)のように記した。

ひのへたつ

ひのとみ

つちのへむま

つちのとひつし

かのへさる きのへ

かのととり きのと

みづのへ^い□^ま□^ま

「(ウ)

庄内軍記上目録

一 島津幕下本領改替の事

一 忠棟陰謀露頭事付被誅事

翻刻 異本二卷本『庄内軍記』 上巻

橋口晋作

今回、ここに校合、翻刻して紹介しようとしているものは、昭和五十

年八月に都城市図書館から翻刻、発行された二巻本『庄内軍記』（同系

統本に鹿児島県立図書館が所蔵する東郷氏旧蔵本『庄内軍記』^(注一)や『天誅

録 拾遺』、更に都城島津家、東京大学資料編纂所、今村氏本の三冊本

『庄内軍記』がある）とかなりの異文をもつ二巻本『庄内軍記』である。

所蔵者は宮崎県北諸郡山田町にお住まいの日高津代氏。同本の書誌は、

写本一冊、上巻のみ。表紙は灰汁色の共表紙。縦二五・五糎、横一

六・三糎。目録二丁。本文九十二丁。絵図三丁（半丁は裏表紙を兼ね

る）。行間に時々、読み仮名、補入、訂正等の書き込みがある。目録

には朱の章段名の書き込みがある（主に下巻のもの）。

の通りである。表紙に安政六（一八五九）年三月六日の日付けがある。

この本が写本で、原本（親本）が山田郷あたりに伝えられていたこと

は、校合に用いた桂木本の存在によって推定される。桂木本は上・下が

揃っている（上巻に比べて下巻の丁数がかなり少ないので「拾遺」が付い

ていたかと思われるが、「拾遺」の存在は不明）。桂木本には、

文久元年辛酉六月廿三日写之 山田瀬之口住士 桂木與相書

という奥書きがある。桂木本と日高氏蔵本は、始めの方は一丁の字数ま

で一致している。互いに誤写を正し得る関係にあるが、桂木本の方が写

し方はより正確だったように思われる（桂木本の上巻始めの方は総ルビ

に近い）。猶、親本は「重清を案内のため鎧を」（「案内ト為テ」の誤り）

かもしれない。

筆者は拙稿「平田三五郎物語の流れ」^(注三)の「三」で、都城市立図書館蔵

本の「拾遺」を引いて

拙斉の「キノフマテ」の歌が平田三五郎を悼んでのものだとか、他の

資料に出てこない記録、記憶で危い気がするし、

と述べたが、この本の存在によって訂正しなくてはならなくなった。こ

の他、訂正を要することは少くないが、それは次稿にまわすことにした

い。

（注一）拙稿「『庄内軍記』^{都城市立図書館蔵本}校異（異文）表（上）（下）」（『研究

年報』第十一、十二号）の鹿児島県立図書館蔵本のことである。

（注二）拙稿「『庄内軍記』をめぐって」（『研究年報』第十五号）で簡単

に紹介した。

（注三）『研究年報』第十八号。